

閉会挨拶

平田 泰雅（森林総合研究所 REDD 研究開発センター長）

本日は長い時間、当国際セミナー「REDD プラス・始動元年 2020 持続可能な開発のための国際移転可能な成果に向けて」にご参加いただき、感謝する。今日一日、非常にホットな議論、情報の提供があった。われわれがこの「始動元年」に込めた意味は非常に重いものがある。2007年、国連気候変動枠組条約第13回締約国会議のときに初めて REDD の議論が始まった。そのときに最初に目標としたのは、森林減少・森林劣化を抑制して温室効果ガスの排出を抑制するというところで、それを実際に動かすために何と13年も議論を重ね、ようやく始動にこぎ着けた。われわれ森林総合研究所も、その第13回締約国会議に専門家を派遣して、この議論に参加して以来、13年間、この議題に対して研究的な側面、また科学技術的な側面からさまざまな貢献を図ってきた。

われわれ研究センターは既に10年目を迎えるということで、非常に長期にわたってこうしたセミナーを開催してきた。この10年間で、この国際セミナーをはじめ、気候変動枠組条約でのサイドイベント、あるいは国内向けの技術セミナー、ワークショップを既に42回開催しており、REDD の議論だけで42回のセミナーが開催できるほど、課題が多かったということが分かる。本日の話の中で、Buszko-Briggs さんが、「REDD+は難しい、それでも走りながら問題解決していかなければならない」とおっしゃっていた。42回のセミナー、ワークショップを開催したのは、走りながら解決しなければいけない議題が非常にたくさん山積していたということだ。

また、この13年というのは非常に長い年月でもあり、この議論が始まった当初は、ブラジルは森林減少抑制に向けて強い意志を示され、モニタリングシステムをつくり、森林減少を抑制するためのいろいろな仕組みをつくっていたのが、13年もたってみると昨年の夏のように、主に開発が原因となる森林減少が起こった。皆さんもテレビで目にされたかもしれないが、火災が森林減少を引き起こしていたということで、大きな目標に向かっていくというのも簡単ではないということがよく分かる。

また、本日の議論の中で、地域住民にも参加してもらわなければいけないといった重要性が強調されていた。その一方で、この REDD+は、気候変動の緩和に役立つが、緩和というのはグローバルな課題であり、長いスケールで影響を及ぼすものであるということで、身近な生活に直結しない部分もかなりあるため、住民参加が難しくなっている部分もある。

そんな中で、本日はミャンマーの Nyi Nyi Kyaw 長官の、ミャンマーで気候変動に対する緩和と適応を同時に進められているという話が非常に印象的だった。「適応」というのは、非常に身近な、ローカルスケールの問題が多々ある。例えばマングローブを切ったら海水がハリケーン等が入ってきてしまったなど、そういった問題はかなり身近な問題なので、地域住民も巻き込みやすい。そういうことで今後、この REDD に資金を集めることは当然だが、適応とセットで進めていくことが、特に途上国の場合、適応と緩和を切り離すのが難しいこともあるので、重要であると実感した。

Closing Session

この REDD セミナーではかつて、現在東京大学¹の先生になられている高村ゆかり先生が、「REDD+は SDGs の実質の良い活動である」ということをおっしゃっていた。持続可能な開発目標を達成するために、気候変動に関わる目標 13、森林を含めた生態系の保全の目標 15、さらには貧困問題の目標 1、さらにはもしかしたら水の問題にもつながっていくかもしれないということで、REDD+の推進が SDGs の達成に大きく貢献するという話をされていた。その意味で、限られたリソースを効率良く森林保全の活動に差し向けて、実際に森林減少・劣化を抑制するという当初の目標を達成できればと思う。われわれ REDD 研究開発センターにおいては、REDD+の達成、気候変動に対する緩和と適応、このような側面で研究を進めてきたものを、技術解説書等にまとめている。これはホームページにも掲載しており、ご連絡いただければ印刷物もお送りできるので、ぜひご活用いただきたい。

本日、登壇されたスピーカーの皆さま、特に遠い国から来られて非常にお疲れの中ご登壇いただいた皆さま、さらに貴重な時間を割いて本セミナーに参加していただいた皆さまに感謝申し上げます、閉会の言葉としたい。

¹ <https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/index.html>